

長野公園長野地区

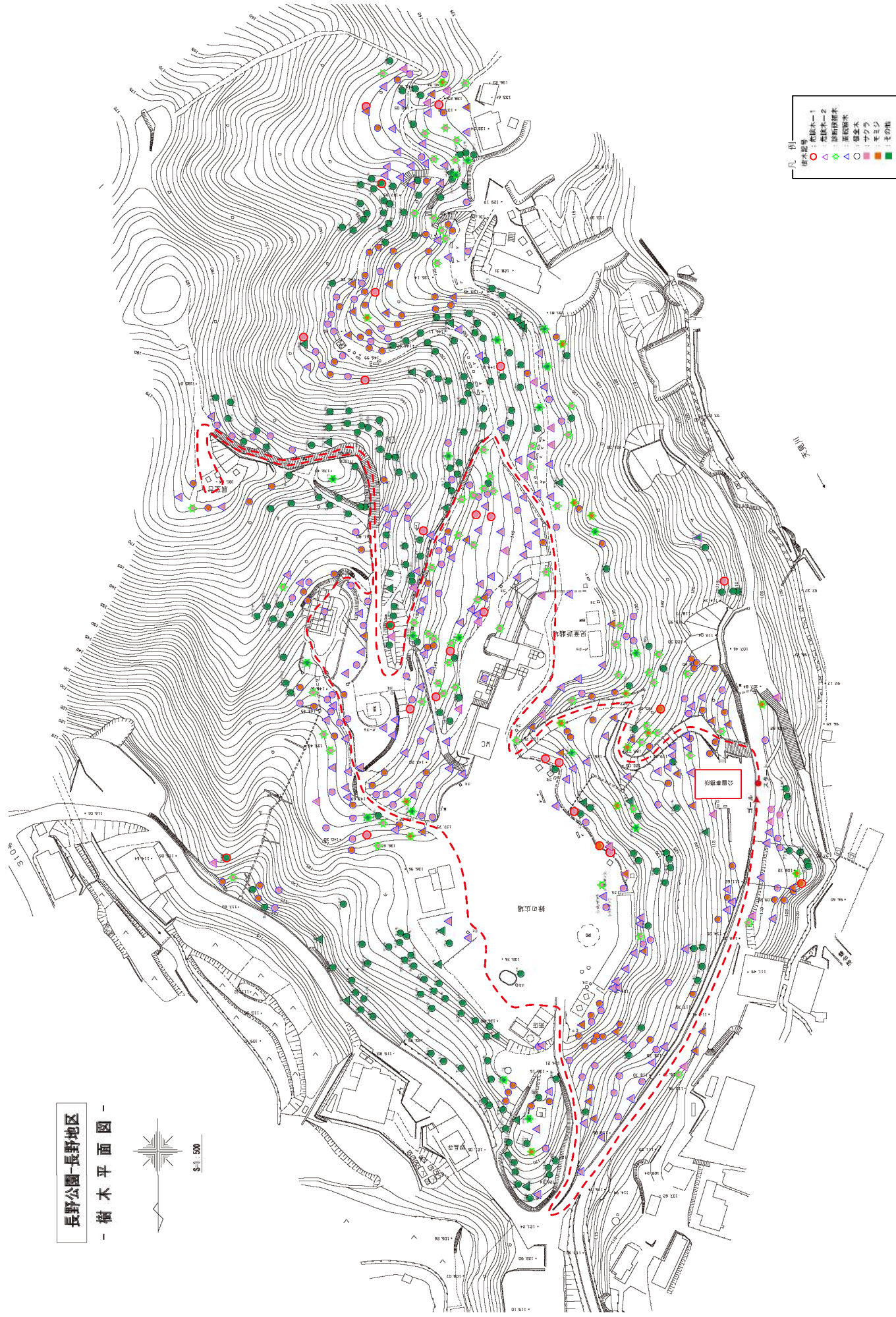
春の樹木観察会

平成23年4月



主催：都市公園長野公園管理共同体
協力：NPO法人樹木環境ネットワーク協会

— 圖 面 平 木 樹 —



—凡例—

バラ科サクラ属

ソメイヨシノ(染井吉野)	1
シダレザクラ (枝垂桜)	1
ウメ (梅)	1

バラ科カナメモチ属

カナメモチ (要藺)	2
------------	---

ブナ科コナラ属

コナラ (小檜)	2
シラカシ (白欆・白檀)	2
アラカシ (粗欆)	3
カシワ (柏、榲)	3
クヌギ (櫟、栲、橡)	3
アベマキ (栲)	4

ブナ科シイノキ属

ツブラジイ (コジイ)	4
-------------	---

モチノキ科モチノキ属

モチノキ (藺の木)	4
クロガネモチ (黒鉄藺)	5
ソヨゴ	5
ナナミノキ	5

ニレ科エノキ属

エノキ (榎)	6
---------	---

ニレ科ムクノキ属

ムクノキ (椋木、椋の木、椋樹)	6
------------------	---

クスノキ科ニッケイ属

クスノキ (樟、楠)	6
------------	---

クスノキ科タブノキ属

タブノキ (楠の木)	7
------------	---

スギ科スギ属

スギ (杉)	7
--------	---

スギ科メタセコイア属

メタセコイア	7
--------	---

マツ科マツ属

アカマツ (赤松)	8
テーダマツ	8

ヒノキ科ヒノキ属

ヒノキ (桧)	8
---------	---

カエデ科カエデ属

モミジ(もみじ)	9
----------	---

カバノキ科クマシデ属

アカシデ (ソロノキ)	9
-------------	---

マメ科エンジュ属

エンジュ	9
------	---

カキノキ科カキノキ属

カキノキ (柿の木)	10
------------	----

ヤマモモ科ヤマモモ属

ヤマモモ (山桃)	10
-----------	----

一般名：ソメイヨシノ（染井吉野）
学名：Prunus Yedoensis

科属名：バラ科サクラ属



ソメイヨシノは里桜の代表であり、公園や街路・河川の堤防など各所に植栽されている。葉の展開に先立って花が咲くので、花としては見応えがある。

ソメイヨシノはオオシマザクラとエドヒガン（または園芸品種のコマツオトメ）の雑種であり、学名の種小名の先頭に雑種を意味する×印が記されている。不稔であり、開花しても普通果実はできず、花が散るとやがて花柄は一斉に落下してしまう。希に果実が形成されるが、発芽する種子はほとんど無いようである。

植栽してから15年ほどすると花付きが良くなり、20～40歳の期間は見事に花を咲かせる。その後次第に樹勢が衰え、50歳を過ぎると衰えが目立つことが多い。

一般名：シダレザクラ（枝垂桜）
学名：Cerasus spachiana f. spachiana

科属名：バラ科サクラ属



枝がやわらかく枝垂れる桜の総称。エドヒガンの系統が多く、品種もさまざまである。ヤエベニシダレやベニシダレなどが有名。キヨスミシダレのような品種もある。

開花時期は4月である。枝垂桜は、枝が長くその名の通りにしだれている。

一般名：ウメ（梅）
学名：Prunus mume

科属名：バラ科サクラ属



春の到来を知らせる花。中国原産の樹木で、奈良時代に薬用として導入されたという。元々は「ムメ」と発音されていたようで、これが学名の種小名に採用されている。学名を付けたのは江戸時代に長崎に来ていたシーボルトである。

ウメの果実は梅干し、梅酒などに利用され、各地で栽培されている。和歌山県の田辺市付近や徳島県などの古生層地帯が栽培の名産地である。果実は酸味が強く、クエン酸・コハク酸・リンゴ酸・酒石酸などの有機酸を含んでおり、風邪や疲労回復などに効果があるという。しかし、イメージとしてはおにぎりや弁当にいれる梅干しであり、防腐効果がある。

一般名：カナメモチ（要藹）
学 名：Photinia glabra

科属名：バラ科カナメモチ属



カナメモチは関東以西の温暖な地域に生育する常緑の小高木で高さ5mになる。葉は長さ7～12cm。春の新葉は赤く、葉が成熟するにしたがって緑色となる。葉は堅く、乾燥に対して強い抵抗性があり、強い日照がある場所に生育する。成長は遅く、アカマツ林や自然林の尾根筋などに生育している。花は5月から6月にかけて咲き、果実は秋から冬にかけて赤く熟す。乾燥に強いことから、治山植栽に利用されたこともあり、岡山市の操山では大きく育った群落がある。生け垣などの植栽や庭園木としても利用される。材は堅く、農具の柄などに利用された。和名は、葉が堅いことから金属的であるとの意味であろう。また、新葉が赤いので、アカメモチとも呼ばれる。カナメモチの葉が赤いのは、葉緑素の形成が新葉の展開に比べて遅れるからである。葉緑素が形成されると次第に紅色は色あせ、緑色に変わっていく。せっかく葉を作ったのに、葉緑素も同時に作ればいいと思うのだが、様子を見ながらじっくり時間をかけて葉緑素を作る。

一般名：コナラ（小櫓）
学 名：Quercus serrata Murray

科属名：ブナ科コナラ属



コナラは北海道から九州に分布する落葉性の高木で、冷温帯下部から暖温帯にかけて生育する。名前は「小さい葉の小櫓（なら）」の意味。伐採されても切り株から「ひこばえ」（萌芽）を形成して再生する。このような萌芽再生能力が高いために薪炭林の主要樹種となっており、二次林を構成する代表的な樹種である。時折神社の境内などで直径1m近いコナラの巨木に出会うことがある。里山で見慣れているコナラに比べ、すっきりと生育した姿には圧倒される。本来は冷温帯の下部から暖温帯の上部などに生育していたものであろうが、萌芽再生力が高いためにより温暖な地域で二次林を構成するようになったのではなかろうかと考えている。葉は水分調節能力が低いようで、その代わりに根系をよく発達させている。逆に言えば、適潤地で大きく生長できる。ドングリから芽生えた稚樹は太い根を発達させる。地上部は爪楊枝ほどの太さであるが、地下部は割り箸サイズ、簡単には掘り取れない。直径20cmほどの個体の引き抜き試験を実施したことがあるが、大型のバックホーとワイヤーでも引き抜くことはできなかった。直根をよく発達させるので、土砂崩れなどの防止には大きく貢献しているも

一般名：シラカシ（白櫓・白樺）
学 名：Quercus myrsinaefolia Blume

科属名：ブナ科コナラ属



シラカシは本州から九州、中国にも分布する常緑の高木。岡山県では乾燥する沿岸部には少なく、雨量の多い県中部以北に生育する。葉は長さ4～13cm、やや皮革質で端正なイメージがある。裏面は緑白色であるが、あまり白くはなく、やや白味がかかる程度。4～5月に尾状の雄花序が下がり、堅果（ドングリ）はその年の秋に稔る。殻斗は6～8の環があるのが特徴である。山地に生育している状態では直幹がすらりと伸びて、樹高は20mほどになる。和名は葉の白さではなく、材が白い事に由来する。器具材に利用されてきたが、現在では公園樹や庭木としてよく利用されている。関東地方では極普通に生育するカシであり、生け垣・防風林として仕立てられることも多い。

一般名：アラカシ（粗榧）
学 名：Quercus glauca

科属名：ブナ科コナラ属



アラカシは本州（宮城県、石川県以西）・四国・九州・沖縄、朝鮮からアジア東南部に分布する常緑の高木。岡山県に分布する常緑のカシ類としては最も普通の種である。現在、斜面下部などで生長しつつあり、近い将来アラカシの優占した常緑広葉樹林が各地で見られるようになるであろう。常緑カシの中では二次林的性格が強く、萌芽性が高く、多幹になっているものも多い。急傾斜地などの不安定な立地に生育するのが本来の姿ではないかと思う。生け垣にもよく植栽されており、棒ガシなどとも呼ばれている。植栽する際に棒のように切りつめて植栽するからではないだろうか。関東地方ではシラカシによる生け垣が多いが、中国地方の温暖な地域ではシラカシが分布していないことが多く、アラカシが主役である。シラカシに比べて芽だしが早く、ほぼ落葉樹の芽出しと同じ時期に新芽が出て、春の到来を感じることができる。アラカシの葉はうどん粉病にかかりやすい点は、庭木としては欠点であろう。葉の表面に粉を吹いたような病斑ができ、次第に広がっていく。秋から春にかけ、日陰の葉がかかることが多いが、日向の葉にも発生することがある。勢いの良い若木の樹皮は平滑であるが、生長した木の樹皮は小さな凹凸がある。

一般名：カシワ（柏、榧）
学 名：Quercus dentata Thunb. ex Murray

科属名：ブナ科コナラ属



カシワは北海道から九州にまで広く分布する落葉の高木である。東北地方などでは日本海側の海岸沿いに多く、中国地方では脊梁山脈地帯の尾根筋などに生育している。太い枝と丈夫な葉を付け、強風にも強い抵抗性を示す。中国地方では牧場の周辺、谷筋等にも点々と生育しており、牧草地の火入れなどにも強いのであろう。柏（カシワ）は縄文時代の土器（蒸し器）の底に敷いてご飯などを蒸すのに利用したという。餅を包んで柏餅を作るのにも利用する。カシワだけではないが、この仲間は冬に葉を落とさない傾向が高い。特にカシワは葉を落としにくく、冬でも枯れ葉をまとい、冬の寒さを堪え忍んでいるように見える。この傾向は小さな個体・下の方の枝で目立つ。コナラやアベマキなどでも、小さいときには葉が枯れても落とさないことがある。小さい間はできるだけ葉を落とさず、下生えの植物に対して光を与えないように妨害していると考ええると面白い。

一般名：クヌギ（櫟、栲、橡）
学 名：Quercus acutissima

科属名：ブナ科コナラ属



クヌギは岩手県・山形県以南の本州・四国・九州に広く分布する落葉高木。岡山県には少なく、薪炭用などのために植栽されたものと考えられる。アベマキによく似ているが、幹の科尔ク層の発達が良い点、葉の裏に星状毛がない点などで区別できる。教科書的にはコナラと並んで夏緑広葉樹の代表としてあげられ、「クヌギ・コナラ林」のように使われる場合が多い。林業的にはクヌギとアベマキは明瞭な区別がなされていないようで、治山植栽や復元緑地への植栽に関しても、「クヌギやコナラを植栽する」などの表現がなされ、ポット苗が植栽されることも多くなってきた。クヌギはアベマキに比べ、樹幹が直通である印象があり、薪炭材として利用しやすいであろう。また、しいたけのほだ木として利用される。

一般名：アベマキ（栲）
学名：Quercus variabilis

科属名：ブナ科コナラ属



アベマキは落葉性の高木で、クヌギに似ているが、樹皮に厚いコルク層が形成される点と葉の裏面に毛がある点で区別できる。岡山の沿岸地帯では、マツ枯れの跡地を回復する主要樹種として、コナラとともに重要である。

アベマキは「あばたまき」の意味で、樹皮がコルク層の発達によってあばた状になる様子を意味していると言う。樹皮を拡大してみると、年輪のようにコルク層が形成されていることがわかる。岡山地方の地方名が標準和名に採用されたものといわれている。コルク層が厚いために薪、木炭、椎茸のホダギとしてはクヌギに劣ると言われている。ワインの栓などに使用するコルクは、地中海沿岸に生育するコルクカシから採取したものであるが、アベマキのコルク層はそれほど発達しない。第二次世界大戦中から戦後しばらくの間はアベマキのコルクで代用した。多くは一度砕いて糊で固めた粉コルクとして使用した。

アベマキのドングリは、大きく、成熟するのに足かけ2年を必要とする。

一般名：ツブラジイ（コジイ）
学名：Castanopsis cuspidata

科属名：ブナ科シイノキ属



ツブラジイは岡山県では点々と見られるものの、数は少ない。特に県南の瀬戸内気候の地域では神社の社叢林などに見られるに過ぎず、アラカシなどのカシ類に比べて乾燥に弱いようである。葉の裏が銀褐色である点が特徴の1つである。

ツブラジイの種子は別名の通り小さく、樹皮は割れることがない。スダジイの樹皮は縦に割れるとされている。しかしながら、両者の区別は必ずしも明確ではなく、中間型も多い。ツブラジイは寿命が短く、100年を超えることは少ないという。しかし、スダジイは寿命が長く、巨木となって地域の天然記念物などに指定されて保護されている場合も多い。

一般名：モチノキ（鵜の木）
学名：Ilex integra

科属名：モチノキ科モチノキ属



モチノキは本州、四国、九州、南西諸島に分布する常緑の小高木。常緑広葉樹林に生育し、特に温暖な沿岸域に生育する。海岸のウバメガシと混生すること多いが、ウバメガシに比べてより立地環境の良好な場所に生育し、シイ林中にも見られる。比較的乾燥にも強く、潮風にも耐えるものと思われる。しかしながら、岡山県の沿岸部では少なく、ウバメガシほどは耐乾性は強くないものと思われる。幹は灰褐色でツルリとしており、葉は革質できょ歯がなく、特に特徴がない。特に小さな個体は同定しにくい植物の1つである。

モチノキの樹皮から鳥餅を作り、これが和名の由来となっている。雌雄異株であり、4月頃に4枚の花弁を持つ花を開く。秋には赤い果実を形成する。乾燥に強く強健であり、刈り込みにも耐えること、果実も美しいことなどから庭園に植栽される。

一般名：クロガネモチ（黒鉄鰐）
学名：Ilex rotunda Thunb.

科属名：モチノキ科モチノキ属



クロガネモチは関東以西本州・四国・九州・琉球、台湾・朝鮮南部・中国の暖地に生育する常緑高木。葉は革質で楕円形。鋸歯がなく（全縁）、ライターなどであぶると少しして黒く変色する（死環）。新しい枝は紫色を帯び、稜がある。雌雄異株であり、雌株には赤い果実がたくさんつくので、庭園木や街路樹などに植栽されている。刈り込みにも良く耐えて幹以外からはよく萌芽する。庭木としては、もちろん雌株の方が価値が高い。花は5～6月に咲き、淡い紫色。花弁は4～6(7)枚であり、雌花の雄しべは退化して小さい。

自然状態では、尾根筋や斜面上部などの比較的明るい場所に生育している。樹高も高木としてはあまり高くないので、このような場所での生育に適しているのである。春の新芽時に昨年の葉をいっせいに落下させる。

一般名：ソヨゴ
学名：Ilex pedunculosa Miq.

科属名：モチノキ科モチノキ属



ソヨゴは関東地方・新潟県以西の本州・四国・九州に分布する常緑の高木。二次林の構成種としてポピュラーな樹木であり、アカマツ林中に多くみられる。亜高木層から草本層に出現し、高木になることは少なかったが、マツ枯れによって高木のアカマツが枯損し、一躍脚光を浴びることになった。マツ枯れ直後は日照条件の回復に伴って旺盛な生育を見せていて、ソヨゴ林になるかと思われたが、現在では次第に減少しつつある。減少しつつある原因の一つは根の浅さにある。根系は直根を持たず、ほとんどの根が地表直下を横走しており、地上部の支持力が低いのである。そのため大きく生長すると次第に傾き、根元や幹の途中からやり直しせざるを得ない状況となる。台風などによっても倒伏しやすく、足下がしっかりしていない樹木の宿命である。

葉は革質で卵状楕円形。普通全縁で鋸歯はない。雌雄異株であり、花の数は少ないが、蜜源として重要であるという。材は建築用材などにはならないが、良質の炭として利用された。葉を熱すると膨れてパチンと音を立ててはじけるので、岡山県では「ふくらし」あるいは「ふくらしば」と呼ぶ。

一般名：ナナミノキ
学名：Ilex chinensis

科属名：モチノキ科モチノキ属



ナナミノキは静岡県以西の本州・四国・九州、中国に分布する雌雄異株の常緑高木。岡山県では、海拔400m以下の温暖な地域の森林に生育する。特に沿岸部では、松枯れ後の二次林で大きく生長して優勢となっている地域がある。沿岸部では乾燥のために常緑のシイ・カシ類が欠落あるいは生育が少ない地域が広いが、このような地域で高木となっていることが多い。幹は直通で、樹肌はなめらか、葉は皮革質で目立った特徴がない。学生さんにはおぼえにくい樹木である。この樹もモチノキ科の例にもれず、ソヨゴと同様に、明瞭な死環がみられる。6月頃に淡紫色の小さな花をさかせる。モチノキ科の花は淡緑色や白色が多いので、このこともこの木を同定するのに役だつ。秋には赤色の果実を付けます。成り年が明確で、ほとんど果実を付けない年もあります。モチノキ属の果実は、球形のものが多く、このナナミノキだけはやや細長く曲がっており、このことから“斜めの木”と命名されたという説があります。

一般名：エノキ（榎）

科属名：ニレ科エノキ属

学名：Celtis sinensis var. japonica



東アジアに分布する。エノキ属は熱帯から温帯にかけて100種ほどが知られている。

雌雄同株で高さは20m以上、幹の直径は1m以上になる。枝が多く、枝ぶりは曲がりくねっている。根元で数本に別れていることもある。樹皮は灰黒褐色。葉は互生し、長さ4-9cmの卵形又は長楕円形で先は尾状にのびている。葉の質は厚く、縁は鋸歯状だが先端まで葉脈が発達しておらず、丸みを帯びている。

花には雄花と雌花がある。葉と同時期（4月頃）に葉の根元に小さな花を咲かせる。花の後に直径5-6mmの球形の果実をつける。熟すと橙褐色になり食べられる。味は甘い。

木材の質はやや堅いが強度はそれほど強くない。また狂いが生じやすい。辺材と心材の境が明瞭でない。建築用材、家具材、道具材、薪炭などに使われる。風合いが似ている事からケヤキの代用とされる。

一般名：ムクノキ（椋木、椋の木、椋樹）

科属名：ニレ科ムクノキ属

学名：Aphananthe aspera



日本では関東以南の本州から四国、九州でごく普通に見られ、琉球列島ではまれで屋久島、種子島、沖縄島に分布する。日本国外では、朝鮮、台湾、中国に分布する。特に人家周辺の神社などによく見かける。

雌雄同株で高さは20m以上、幹の直径は1m以上になり、板根が発達する場合もある。樹皮は淡灰褐色で、表面は平滑だが樹齢に伴ってすじや割れ目が生じ、老木では樹皮が剥がれてくる。葉は互生し、長さ4-10cmの卵形又は狭卵形で、縁は先端まで鋸歯状、葉脚はくさび状、3行脈を持つ。葉の質は薄く、表面は細かい剛毛が生え、紙ヤスリのようにざらついている。

花期は4-5月頃。花には雄花と雌花がある。葉と展葉とともに葉の根元に淡緑色の小さな花を咲かせる。花の後に直径7-12mmの球形で緑色の果実（核果）をつける。熟すと黒紫色になり食べられる。味は非常に甘く、美味である。ムクドリなどがよく果実を食べに集まり、種子の散布にも関与している。

一般名：クスノキ（樟、楠）

科属名：クスノキ科ニッケイ属

学名：Cinnamomum camphora



幹の太さがひとかかえ以上になるものも多く、単木ではこんもりとした樹形をなす。木肌は綿密で、耐湿・耐久性に優れている。葉はつやがあり、革質で、先の尖った楕円形で長さ5-7cm。主脈の根本近くから左右に一对のやや太い側脈が出る、いわゆる三行脈という形である。その三行脈の分岐点には一对の小さな膨らみがあり、これをダニ室という（後述）。初夏に大量に落葉する。

晩秋、直径7-8mm程度の球形の果実が黒く熟し、鳥が食べて種子散布に与るが、人間の食用には適さない。直径5-6mm程度の種子が一つ入っている。

枝や葉に樟脳の香りがある。樟脳とはすなわちクスノキの枝葉を蒸留して得られる無色透明の固体のことで、防虫剤や医薬品等に使用されるいわゆる”カンフル”のことである。

一般名：タブノキ（榎の木）

科属名：クスノキ科タブノキ属

学名：Machilus thunbergii Sieb. et Zucc.



タブノキは常緑の高木であり、日本各地の暖帯林に普通（しかし、岡山県では極少ない種である）。スダジイ林の構成種であるとされ、教科書などではシータブ林として掲載されていることも多い。直径1mを越えるような大木になるが、樹高はシイに比べて高くなることはないので、通常はシイ林の亜高木として生育している。また、シイよりも潮風に強く、海岸ではシイよりも前線に生育するので優占する場所もある。

一般論としてはこのような話になるのだが、岡山県を中心とする瀬戸内沿岸地帯では生育することが少なく、海岸林を形成することはない。岡山県の分布では、海岸平野には分布が見られず、県中部の吉備高原地域に生育しており、降水量に強く制約を受けていることがわかる。タブノキの生育立地は、重力水のある場所であると表現されることもある。生育に豊富で安定した水分が必要である。近年、公園や街路などに植栽されることも多くなってきたが、おそらく長期にわたって瀬戸内沿岸域において安定的に生育することは困難であると考えられる。

葉や樹皮には粘性がある。例えば葉柄を切り取ってもう一度ひっつけてゆくと離すと、粘液の糸を引く。このような粘着性を利用し、線香の粘結剤として利用されたという。

一般名：スギ（杉）

科属名：スギ科スギ属

学名：Cryptomeria japonica (Linn. fil.) D. Don



スギは常緑の高木である。自然分布としては、本州・四国・九州の冷温帯下部から暖温帯上部に分布していたものと思われるが、植林などによる人為によって分布は暖温帯全体にまで広がっている。樹高は40m、直径2mにも生長し、優良材である。屋久島に生育する縄文スギは推定樹齢7200年とされ、これが事実であれば世界一長寿の樹木である。

スギはヒノキとともに植林の主要樹種である。ヒノキにくらべて水分を好むので、谷沿いなどの適潤地からやや過湿な立地に植栽されることが多い。自然状態では、湿原の周辺にも生育しており、水湿に強い抵抗性を持っている。

一般名：メタセコイア

科属名：スギ科メタセコイア属

学名：Metasequoia glyptostroboides



メタセコイアはアケボノスギという和名が付けられたがあまり流布せず、属名をそのまま読んでメタセコイアと呼ばれることが多い。化石としては日本各地からも発見されていたが、1941年に中国四川省で発見されるまでは生きていたものは知られていなかった。日本にも300万年から100万年前頃まではたくさん生えていたらしい。その頃からあまり進化していないらしく、生きていた化石として有名である。

樹形は針葉樹の仲間らしく端正で美しい。葉は枝に対生して複葉に見える。秋には紅葉し、短枝ごと落下する。落葉性の針葉樹である。早春に葉の展開に先立って枝先に雄花を多数咲かせる。雌花は緑色で、球果を形成し、秋に種子を散布する。樹形が美しいこともあり、公園や街路樹などとして植栽されている。成長は若木では大変良好。

一般名：アカマツ（赤松）
学名：Pinus densiflora

科属名：マツ科マツ属



アカマツは北海道南部から屋久島まで広く分布し、二次林に広くみられる樹種である。痩せ地にも耐えて生育し、乾燥した尾根から湿地にも生育する。名前の由来は樹皮が赤いことに由来する。樹皮は根際の部分は厚く、亀甲状に割れ目がはいるが、1m位よりも上は薄く剥がれて赤い色となる。

アカマツは春に花を咲かせ、風によって花粉を散布する。季節には水たまりの表面が黄色くなるほどの花粉生産量である。種子も風によって散布される。

秋の晴天時にマツカサの鱗片が開き、種子が散布される。種子は光発芽の特性があり、光が当たる場所で発芽しやすい。生長にも強い光が必要であり、禿げ山のような林床にまで十分に日光が当たる場所で発芽・生長ができることになる。現在大きなマツが育っている場所も、そのマツが芽生えた時には禿げ山であったわけである。

アカマツは人間が森林を伐採していない時代においては、岩峰や崖、湿原のほとり、河川の周辺などに生育地していたものと思われる。人間の活動によって急激に分布を拡大し、今、森林の放置とマツ枯れ病によって急激に個体数を減少させている植物である。

一般名：テーダマツ
学名：Pinus taeda

科属名：マツ科マツ属



テーダマツは北アメリカのテネシー、オクラホマ、フロリダ、テキサス等に分布する常緑の高木針葉樹。原産地では樹高30m、直径1mほどになり、用材樹種として重用されている。性質も日本のアカマツと同様に、先駆的な性格が強いという。樹形はアカマツとよく似ているが、枝打ちはアカマツよりも荒い印象がある。原産地では樹高30mを越える大木に成長する。

葉は3本づつ出る三葉マツ類であり、長さは20cm前後。樹皮は亀甲状に割れるがクロマツほど厚くはないようである。球果は長さ7~15cmほどでやや大きく、鱗片の先端に下向きの棘がある。マツ枯れに抵抗性があり、マツ枯れ病の蔓延の後に各地で導入試験が行われ、リギダマツと同様に公園や見本林などで大きく成長したものが時折見られる。マツ枯れに強いために注目されているが、大きくなるとそれなりの樹形になって美しいが若木では荒れた感じがあって日本のマツ類とは異質な感じがある。

一般名：ヒノキ（桧）
学名：Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Sieb. et Zucc.

科属名：ヒノキ科ヒノキ属



ヒノキは常緑の高木であり、スギと同様に植林の主要樹種。福島県以南の本州・四国・九州の山地に生育し、尾根や崖地などの痩せ地に生育する。樹高は20~30mになるが、大きいものでは高さ50m、直径2.5mほどにもなる。葉は鱗片状になって枝に密着しており、対生。材は美しく耐久性が高い、高級建築材である。

ヒノキは桧の字を当てられているが、元来は「火の木」であり、こすり合わせて火をおこしたことに由来するという。

一般名：モミジ(もみじ)
学 名：Acer palmatum Thunb

科属名：カエデ科カエデ属



イロハモミジは福島県以西の本州、四国、九州、朝鮮に分布する落葉の小高木。主に太平洋側の低山に生育する。葉は5～9つに掌状に分かれ、やや荒い鋸歯がある。タカオカエデ、イロハカエデとも呼ばれ、庭園等にも広く植栽されている。4月から5月にかけて、葉の展開直後に紅色の雄花と両性花が混在した花序を形成する。和名の由来は、葉の裂片を数えるとき「イロハニホヘト」と数えたことに由来するという。しかし5裂であることも多く、特にシュートでは5裂のことが多い。秋の紅葉は美しく、各所で秋の彩りとなっている。

一般名：アカシデ (ソロノキ)
学 名：Carpinus laxiflora

科属名：カバノキ科クマシデ属



アカシデは北海道南部から九州、朝鮮に分布する落葉高木。低地から丘陵地帯の二次林に生育するが、乾燥する瀬戸内地域では少ない。幹は肥大成長が均等に行われなために凸凹になる。葉は長さ4～7cmで端正な形をしている。この仲間としては小さい方である。花は3～4月に咲き、尾状に垂れ下がる。秋に稔る果実には翼があり、種子は風で散布される。アカシデの和名は新芽の芽だしが赤いからか、紅葉が赤いからか、あるいは両方を意味しているのかもしれない。紅葉は美しい。

一般名：エンジュ
学 名：Styphnolobium japonicum

科属名：マメ科エンジュ属



エンジュは中国原産の落葉高木。公園などに植栽されたものでは、樹高15mを超えるのではないかとと思われる。葉は6～7対の奇数羽状複葉で、小葉は楕円形で先端が尖り、時に表に巻く傾向がある。裏面には短毛がある。花は7月に咲き、白色。花序は幅30cmほどで大きな房状。

一般名：カキノキ（柿の木）
学 名：Diospyros kaki Thunb.

科属名：カキノキ科カキノキ属



カキノキは本州、四国、九州、朝鮮、中国に生育する落葉の高木。大きな広い楕円形の葉であり、6月頃に目立たない緑色の花を咲かせる。山に生育しており、葉に毛が多く、子房に毛があるものをヤマガキ (var. *sylvestris* Makino) というが、栽培品種からの実生や雑種もたくさん山に生育しており、様々な形態・サイズのものがある。子房の毛以外に決定的な区別点がないようで、区分は容易ではない。小生はあまり気にしないことにしている。渋いものと甘いものがあり、甘いカキは日本で品種改良された。現在果物として販売されているもののほとんどは外国から導入されたものであり、日本に自生する種から品種改良・作出されたものはカキぐらいしか思い当たらない。

一般名：ヤマモモ（山桃）
学 名：Myrica rubra

科属名：ヤマモモ科ヤマモモ属



ヤマモモは本州の関東・福井県よりも南西部・四国・九州・琉球の暖地・沿岸域に生育する常緑の高木。台湾から中国・フィリピンにも分布する。樹高は10mほど。樹形は落着いており、庭木や公園木などとしてもよく植栽されている。

雌雄異株であり、果実は黒赤色に熟し（夏）、独特の松や二様の味があっておいしい。果実は日持ちがしないので、広い地域に流通・販売されることはなく、地元消費型である。街路樹として植栽されたものにたくさんの果実がなっている事があるが、食べられずに落ちてしまっていることも多い。もったいないことである。近隣に雄株がないと結実ににくいようで、販売されている苗には雄株に雌株を接ぎ木したものもある。

ヤマモモはハンノキ属植物と同様に放線菌と共生しており、空中窒素の固定能力がある。このような能力に注目され、山林火災跡地などの治山植栽に用いられる。全般的には痩せ地にも耐えるとされているが、オオバヤシャブシ等に比べて生育に水分を必要とする。花崗岩地域などの透水性の高い土地では、尾根筋などの乾燥しやすい場所での植栽は成功しにくいようである。一方、谷筋や湿地の周辺では旺盛に生育しているものもあり、山の中における自由競争と保護された庭園木としての性質には違いがあるであろう。

瀬戸内海の島ではウバメガシ林の発達するような立地のなかで、やや水分条件が良いような場所に見られることが多く、ウバメガシと混生していることもある。岡山県の六口島では、クロマツとともに治山植栽されたものが、マツ枯れによってヤマモモの優占群落に変化してしまった場所がある。